

(2023年6月9日配信)

NHK ラジオ深夜便「明日へのことば」

6月16日(金)4時台

「親鸞のところに導かれ」

出演 同朋大学特任教授・親鸞研究家 森村 森鳳

聞き手 坂口 憲一郎

森村 森鳳(中国名・張 偉)さんは、青春時代、中国文化大革命を体験。この大動乱では、2000万人以上が命を落したとも言われる。目の前で見た出来事は、今も忘れることが出来ないという。人間は、どこまで非人間的になれるのか。残酷になれるのか。救いとなったのが、作家、野間宏を通じて知った親鸞の思想だった。独学で日本語を学び、野間作品の中国語訳を依頼された事から、親鸞を知ることになる。野間から親鸞の著作を贈られ、「親鸞を徹底的に学んでください」という遺言も遺された。そして親鸞思想の中心となる「教行信証」を8年、「歎異抄」を10年かけて中国語に翻訳した。今年、親鸞生誕 850 年。中国文化大革命で目撃した悲惨な出来事、、、そして彼女の救いとなった親鸞思想とは何かをお話しいただいた。

— ハソウを楽しむ会 会長としての活動の一端を紹介していきます。 —

N01 バッファロー・ナイアガラフォールズ「鎮魂の歌 巡礼の旅」2017年6月12日～19日

「点と線」で結ばれた「ハソウ」の響き

～ハソウ、アメリカ大陸に渡る～

坂口憲一郎(岡山市在住)

「平安」と銘打ったハソウを携えて、東日本大震災支援のお礼の気持ちを込めて、6人で、アメリカ・バッファローとカナダ・ナイアガラの町を訪れた。早朝のナイアガラ瀑布で、滝の音に負けじとハソウを吹き鳴らし、カナダのネイチャークラブの野外パーティーでは、大正琴とともに音を響かせ、そして五大湖の一つ、オンタリオ湖畔では、透き通る水が広がる湖面に向かい、「鎮魂と平安」の願いを込めて歌い、吹き鳴らした。ハソウが、「鎮魂の歌」に欠かせぬ響きとなって行くのを感じながら・・・琵琶湖の30倍の大きさの北アメリカのオンタリオ湖。湖畔では、かつてフランス、イギリスなどが、土地に住んでいたイロコイ族も含め戦争し、多くの命が失われた歴史がある、石づくりの当時の砦が、湖畔の遠くに見えていた。

ハソウは、不思議な点と線で結ばれている。推理小説「点と線」で知られる作家、松本清張は、芥川賞を受賞した作品「或る小倉日記伝」の中で、「ハソウ」を笛壺の名で紹介しているが、私が、ハソウをアメリカで吹くことになったのは、趣味の備前焼づくりに向かう途中、電車で隣り合わせになった人との出会いに始まったのである。その方から・・・人から人へ・・・線となり、多くの出会いが生まれ、アメリカ、カナダへの旅へととなった。私の好きな言葉、「今やらねばいつできる。わしがやらねば、たれがやる」という彫刻家、平櫛田中さんのことばを大事にして、これからもハソウの歴史を大切に、野次馬根性で、多くの人に会えることを楽しみにしたい。



—オンタリオ湖畔でハソウ演奏—

(左から堀泰雄、メリーハーツエル節子、坂口憲一郎、右原君江)